

特集「社会の知的化を先導するコラボレーション技術とネットワークサービス」の編集にあたって

高田 秀志^{1,a)}

情報通信技術の進展にともなう、従来人間が行ってきた単純作業の多くが機械化され、人間にはより知的な活動が期待されるようになってきている。また、近年の人工知能関連技術の進展により、人間の知的な活動までもが機械化されていくのではないかと憶測も広がっている。しかし、他者と協調し、様々な環境の変化や制約事項に柔軟に対応しながら意思決定や問題解決を行っていく人間の知力には計り知れないものがあり、機械の知能化にともなう、より人間の能力への期待が高まってきていると考えることもできる。スマートフォン等の携帯端末やクラウドを活用したコラボレーションシステムやネットワークサービスは、人間が行っている種々の知的な活動を支えるようになってきているとともに、今後は、IoT (Internet of Things) による様々なセンサ情報や、人工知能によるロボットなどを取り込んで、社会の知的化を先導するのに必要な中核技術になっていくことが予想される。

このような期待に応えるために、本特集では、時宜を得て迅速に関連する研究論文を一括掲載することにより、社会に成果を公開し、グループウェアとネットワークサービスに関する研究のいっそうの発展に寄与することを目指した。

本特集号には20件の論文が投稿され、2017年4月に第1回編集委員会を開催し、投稿論文が特集号のテーマに合致しているかを審議した。そのうち1件については、テーマとして今回の編集委員では適切な査読を行えないと思われるため、著者へ照会した結果取り下げとなり、19件を対象として査読を開始した。同年6月に第2回編集委員会を、同年9月に第3回編集委員会を開催し、慎重な審議の結果、最終的に9件の論文を採録した。採録率は45%であった。

採録論文の内容には、クラウドサービスやIoT、コミュニケーション支援等に関わるものが多く見られ、この分野の研究者だけでなく、ネットワーク等の基盤的な研究領域の研究者にとってもその応用を知る良い機会とすることができた。一方で、良いアイデアであっても十分な社会的

実践をともなったものでなければ、不採録になることも多いと感じられる。妥当性の主張に必要な実験の規模や用いるべき評価手法等について研究者コミュニティで積極的に議論を行い、優れたアイデアの論文が少しでも多く採録されるようになることが必要であると考えられる。今回残念ながら不採録になった論文の中にも興味深いアイデアを提案しているものが多くあった。著者の皆様には、ぜひとも研究を継続し、再投稿されることをお願いしたい。

最後に、特集号の編集にあたり、優れた論文を投稿していただいたすべての著者の貢献にお礼を申し上げたい。また、予定どおり刊行できたのは、多忙の中、短期間での査読に協力いただいた査読者の方々、塩澤秀和、湯澤秀人の両幹事をはじめとする編集委員、学会関係者の多大なるご尽力のおかげであり、ここに心から感謝申し上げる。

「社会の知的化を先導するコラボレーション技術とネットワークサービス」特集号編集委員会

- 編集長
高田秀志 (立命館大学)
- 幹事
塩澤秀和 (玉川大学), 湯澤秀人 (富士ゼロックス)
- 編集委員
市川裕介 (NTT), 市野順子 (香川大学), 市村 哲 (大妻女子大), 井上亮文 (東京工科大学), 井上智雄 (筑波大学), 上杉 繁 (早稲田大学), 江木啓訓 (電気通信大学), 大平雅雄 (和歌山大学), 岡田謙一 (慶應義塾大学), 岡本昌之 (トヨタ自動車), 金井秀明 (北陸先端科学技術大学院大学), 金子 聡 (日本アイ・ピー・エム・サービス), 川口信隆 (日立製作所), 糸 照宣 (富士通研究所), 小林 稔 (明治大学), 斉藤典明 (NTT), 豊浦正広 (山梨大学), 中村聡史 (明治大学), 樋山淳雄 (東京学芸大学), 服部 哲 (駒澤大学), 福島 拓 (大阪工業大学), 三樹弘之 (沖コンサルティングソリューションズ), 三末和男 (筑波大学), 宗森 純 (和歌山大学), 由井蘭隆也 (北陸先端科学技術大学院大学), 吉野 孝 (和歌山大学)

¹ 立命館大学情報理工学部
Faculty of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University, Kusatu, Shiga 525-8577, Japan

a) htakada@cs.ritsumeai.ac.jp